渡辺 紀子（わたなべ のりこ）

もっきり飲み屋の豆腐屋

栗田家は家の中に井戸がある家だった。それは村の中でもそう多くはないことで、貧乏ながらもその点は恵まれた環境だった。サキノの記憶では、家の井戸が枯れたことは一度も無かったという。

井戸のお陰で、栗田家では豆腐屋を営んでいた時期があった。豆腐屋に水はなくてはならないもの。豆腐作りは、母親が動ける時は母親が中心となってやっていた。ただ石臼で豆を挽くような重くて大変な作業は、やはり主に姉たちの仕事だった。
豆腐屋なら豆腐は毎日欠かさず食べられたのか、決してそうではなかったという。

「豆腐っていったら、なにか事あっときに食うもんだ。豆腐のごっつおって言ってたからな。なんぼ、家（うち）で豆腐こしゃってるって言っても、やたらに食うもんではねぇって思ってたから、正月とか何かあっときしか食ったことはなかったなぁ」。

毎日豆腐を目にしながらも、それは買いに来た人の口に入るものとだった。ちなみに、栗田家の正月のご馳走とは、赤い魚（荒巻鮭）、煮しめ、つつっこ納豆、揚げ豆腐か焼き豆腐か湯豆腐、白米と決まっていた。豆腐がぜいたくな食べ物だったとは驚きだった。それが今では日々の食卓に欠かせない食べ物となっている。

豆腐を求めて来る常連客とは、鍋を抱えて買いに来るような人だろう。きっと朝のうちにある程度売ってしまうと、早々に店じまい。そんな想像を働かせていた。ところが、大の常連客は全く想像とは違う顔ぶれだった。
サキノが名前をあげたのは、どの人も村の金持ちの家の男の人たち。毎日のように同じような顔ぶれが、豆腐屋には集っていたのだ。

「学校から帰って来っと、たいがい居間（いのま）に何人かいるもんだっけ。村の○○あんにゃ、○○あんにゃ、○○あんにゃ、…っていつも決まったような人たちが、豆腐つまみに飲んでんのや。だいたい昼頃から来てたようで、晩方くらいまで毎日のように、たぁだ飲んで帰っていく。オレは朝から飛んで回って働いてんのに、この人たちは何なんだべ！稼がねぇ人見んのは、子めらながらにもやんだなぁと思ったっけ。たいがいは、おどっつぁがその相手して居るもんだっけな」。

きかんぼサキがもう少し大人だったら、文句の一つも言ってしまったのかもしれない。栗田家の豆腐屋は、明るいうちから飲める“もっきり飲み屋”のような顔も持っていたようだ。確かに当時、村に飲み屋のようなものは全く無い。家で飲むのが普通の時代だったが、さすがに昼間からどこかの家に行って飲むのも気が引ける。そこで、朝から開いてる豆腐屋は格好のサロンになりえたのだろう。そこに、ちょうど喜んで迎えてくれる相手もいるのだから申し分ない。

実のところ本名は、町の中でも豊かな村だった。御神楽山を含む山林の多くが村の所有で、本名には町内で唯一の財産区が置かれていた。（現在も存続）“本名杉”というブランド名を持つ杉も、森林資源の大きな柱の一つだった。この杉は、奥会津の豪雪地帯で育つためなかなか育ちにくいが、そのぶん目が細かく詰まっている。その結果、腐りにくく丈夫で良質な木材が、本名という集落の大きな経済を支えていた時代だった。

そして、もう一つ本名の経済を支えたのが、高値で取引の出来る山菜の「ゼンマイ」だった。本名の奥山から採れるゼンマイは太く柔らかで、とても上等なものだった。こうした土地柄もあり、あくせく働かずとも昼間から飲んでいられる人が世に憚っていたようだ。

「本名のおなごはよく稼ぐ。“本名男はから身で戻り、本名女はリヤカー引いて戻る”って言う人あったり、“本名男はダラグラどって、いいふりこきなんどばっかしてる”っても言う人あった。オレのきかんぼも、土地柄かもしんにぇな」。

サキノは、ダラグラな男どもを見ながら、とびきりの本名おなごに育ってしまったのかもしれない。